

子どもにおける関係判断の研究—特にきょうだい関係について—

ス保和男 余田純子 ○濱純子
(帝国女子大学)

I. 目的

子どもは、常に自分の観点を絶対的なものとみなしている。そのため、「きょうだい」のような簡単な関係さえ子どもにとっては克服しがたい困難を未だに惹き起こしている。これは関係の論理をうまく使いこなせていないからであり、子どもが自己中心的であるということに起因すると考えられている。これらを検討するために、きょうだい関係把握の仕方の実態を調査し、きょうだいの立場の違いによりきょうだい関係の理解に差があるかどうかを考察することを目的とする。

II. 方法

調査対象 T女子大学附属幼稚園年長児(平均年齢5歳9か月) 男子48名、女子36名
計84名(すべて二人きょうだい)

調査期間 1981年9月8日～9月18日

調査場所 T女子大学附属幼稚園観察室

調査方法 個人面接調査 口頭質問により、8項目の質問をする

III. 結果及び考察

調査結果を分析する際に、被験者を各人がもっているきょうだい別に分類した。その分類及び人数は、表1に示す通りである。

表1. きょうだい別分類 (人)

	兄がいる者	姉がいる者	弟がいる者	妹がいる者
男	8	10	18	12
	18		30	
女	10	6	12	8
	16		20	

この調査では、問1から問4は子ども自身の家のきょうだいについて、問5から問8は絵を見せて仮空の家のきょうだいについて質問した。

問1から問4では、子どもは自分自身の観点から自分のきょうだいをながめ、また、自分のきょうだいの観点から自分をながめることが要求される。

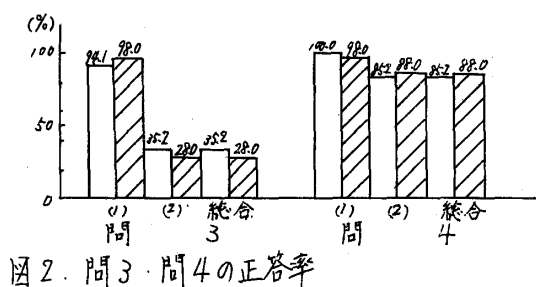
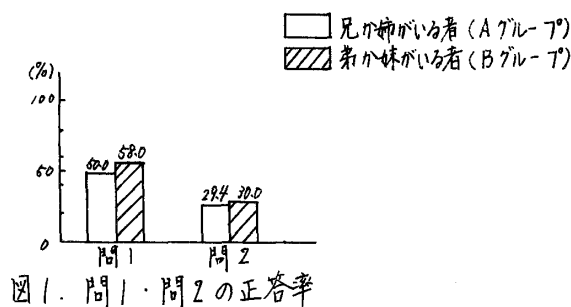
問1は、自分は何人きょうだいであるかを答えるもので、自分と自分のきょうだいを含めた人数を答えなければならぬ。図1に示すように、兄か姉がいる者(以下Aグループとする)50.0%、弟か妹がいる者(以下Bグループとする)50.0%の正答率であった。残り約半数については、両者とも、父母や祖父母を加えたため誤りとなった。正答率としては、Bグループの

方が高いのであるが、相方の間に有意差はみられない。

問2は、家の中のきょうだいの数を答えるもので、問1と同様、自分と自分のきょうだいを含めた人数を答えなければならぬ。図1に示す通り、正しく答えた者は両者とも約3分の1(Aグループ29.4%、Bグループ30.0%)で、父母や祖父母を加えたり、自分をきょうだいの一人として数えたりしたために誤りとなった者が残り約3分の2である。以上2問の結果からここではまだ、「きょうだい」と「かぞく」の区別が明確でないということがいえるのではないだろうか。正答率としては、Bグループの方が高いのであるが、相方の間に有意差はみられない。

問3では、図2に示すように、自分は兄・弟・姉・妹のうちのどれにあたるのかということと、ほとんどの子どもが理解している(Aグループ74.1%、Bグループ78.0%)にもかかわらず、それほどいうことをいうのかということになると、Aグループ35.2%、Bグループ28.0%の正答率で、両者とも約3分の1の者しかいえず、ほとんどがただ、兄・弟・姉・妹ということばを知っているだけということにとどまる。正答率としてはAグループの方が高いのであるが、相方の間に有意差はみられない。

問4では、図2に示す通り、正答率はAグループが85.2%、Bグループ78.0%で、子どもたちの多くが自分にはきょうだいがいるということ、そしてそのきょうだいにも自分というきょうだいがいるということが理解できているということがいえる。正答率としては、Bグループの方が高いのであるが、相方の間に有意差はみられない。問1及び問2の結果から、「きょうだい」と「かぞく」の区別が明確でないと言ったのにもかかわらず、問4では他と比べて高い正答率が得られたということは、子どもたちが、自分と自分のきょうだいの関係を理解しているということになる。しかし、ここでは、問1・問2と違い、兄・弟・姉・妹という具体的なことばがでてきたため、たとえその意味を知らなくてもことばさえ知っていればわかる(自分と自分のきょうだいについてさえ知っていればよい)ということと、子どもたちにとってはお取り組みやすい問いとなり、このような結果が得られたのではないかと考えられる。



問5から問8では、自分とは関係のない架空のきょうだいの名前を知らされ、絵を提示されることにより答えるもので、子どもは全く知らないきょうだいということで最初とまどったようであるが、同じ傾向にあるにもかかわらず後の問いになるにつれて正答率が高くなっているということから、とまどいも徐々になくなったのではないかと考えられる。

問5(1)、問6(1)、問7(1)の、「～には何人のきょうだいがありますか。」では、答えに問われている本人を含まず、問5(2)、問7(2)の、「～は何人きょうだいですか。」では、問われている本人を含んだ答えが正答となる。

正答率は、問5(1)では、図3に示す通り、Aグループ23.5%、Bグループ22.9%、問6(1)では、Aグループ29.4%、Bグループ33.3%であり、問われている本人を含む問5(2)は、Aグループ35.2%、Bグループ35%であるため、(2)のほうの正答率が高いのであるが、問7(1)では、図4に示すように、Aグループ70.5%、Bグループ74.0%、(2)では、Aグループ61.7%、Bグループ48.0%と、(1)のほうが高い正答率を示している。このため、問われている本人を含む・含まないのどちらが容易であるかはいきることではできない。しかし、問6(2)、問7(2)の「全部で何人のきょうだいがありますか。」という問いに対しては、全員が正答であったため、すべてを含むほうが理解しやすいということになる。だが、ここでは、全員ということばのために、絵の子どもをきょうだいとみなしてしまいがちな人数を教えさえすればよいということになるため、この

ことを考慮すると、やはりどちらが取り組みやすいということではできない。

問5(3)、問8では、問5(3)が3人きょうだいの上から下、まん中から下・上、下から上の関係、問8が5人きょうだいのまん中からみて他の4人は何にあたるか、他の4人からみてまん中は何にあたるかということ、つまり、きょうだいの続柄が理解できているかどうかをみる。問5(3)は、図3に示す通り、正答率がAグループ61.7%、Bグループ62.5%で、問8では、図4に示す通り、Aグループ47.0%、Bグループ50.0%となっている。残りの者については、問3と同様、兄弟・姉・妹ということばしか知らないということのため誤りを生じたと考えられる。

問5から問8の総合をみると、問5はAグループが20.5%、Bグループ12.5%、問6はAグループ29.4%、Bグループ33.3%、問7ではAグループ47.0%、Bグループ36.7%、問8ではAグループ47.0%、Bグループ50.0%、というように、問5・問7はAグループが問6・問8はBグループのほうが、それぞれ正答率が高いのであるが、相方の間に有意差はみられない。

全体的にみると、兄弟姉妹をきょうだいにもつ者(自分は兄弟姉妹である)のほうが正答率はやや高いのであるが、兄弟姉妹をもつ者(自分は兄弟姉妹)との間に有意差はみられない。このことから、きょうだいにおける立場の違いは、この調査に関しては影響が小さいというように考えることができる。

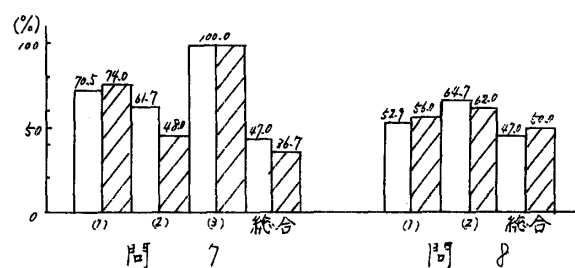
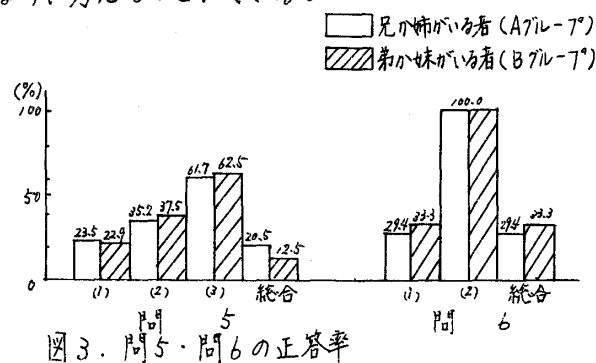


図4. 問7・問8の正答率